



和田傳全集

第九卷

和田傳全集 第9卷

定價 2,800 円

昭和五十三年十一月二十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

〒 162

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 社 団 法 人 家 の 光 協 会

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 | 4 7 2 4

印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社  
製 本 寿 製 本 株 式 会 社

和田傳全集 第九卷



和田傳全集（第九卷）目次

篤農伝

5

野の真珠

189

イタリイ旅日記

374

解説

赤星虎次郎

裝幀  
舟橋菊男

題字  
久住和代

## 篤農伝

— おら、今年こそ馬買うべと思う。

と、黙り屋の忠吉がふいにあらたまった口をきいたので、あとの三人が同時に振り返った。さすがに、四人とも手は休めず、せつせと草鞋を編んでいる。

— ンだんだ、何とかして馬買えや。お前なんか馬買わねえ法ッてあるもんか。

この家の息子、橋本の三次が、彼は忠吉のすぐ脇にあぐらをかいていたので誰より先に言い合わせた。

— そりゃええが、馬買えるだけ蓄まったのかや？　それでもなかんべ？　なぞして買うつもりだや？……誰に銭借りることにしたや？

渡辺の芳太郎が、真顔で訊きかえした。

— そんなに蓄まっていたまるもんか。……去年は、たいしてしまつたあとだものな……。

忠吉は前の年、いまこの場に並んで一緒に草鞋を編んでいる八代の松三郎の娘を嫁に貰ったばかりで、その費用に、草鞋や簀を編んで蓄めた貯金ははたいてしまったあとなのだ。

——じゃ誰に借りることにしたや？

と、妻の父親、八代の松三郎もその時芳太郎と同じことを訊いた。

——誰にッて、まだきめたわけじゃねえがな……。

松三郎から訊かれたので忠吉は言い渋った。

——何とかして買えや。借り馬は、ここに松三郎さんもいられるけど、あんまり得でもねえからな。

芳太郎はちよッと松三郎に遠慮するような眼つきをした。

——ンだ、借り方も損だし、貸し方だって得なことはねえからな。両損で得なした。

忠吉は馬がないので、——馬どころか、家も屋敷もない——前の年嫁を貰うまで松三郎のところの馬を借りて使っていたのである。普通は賃借りであるが、それを彼は手間でかえし、馬一日に対し人間二日という勘定でかえていたのだ。しかし松三郎だって一頭しか持っていないのであった。

——銭の出ッばもきまらねえで馬買うべと思うもなかんべ？

と、橋本の三次がまたそこへ触れて来た。

——それがなあ、おら、御隠居に頼んで見べと思うんだ……。

と、はじめて忠吉は打ち明けて見た。

——御隠居か？

松三郎は少し首をかしげた。

御隠居というのは忠吉の家もその一統である多賀田一門きっての豪家で、大地主で、田地七十町歩を擁している県下の多額納税者である。重次郎はすでに隠居で、当主の重太郎は、そのほかに肥料会社も経営していた。

——駄目だべか？

と、忠吉は怖る怖るのように松三郎の顔を覗き込んだ。

——何ともハアおれにヤ言われねが……。

——旦那じゃなく、御隠居に頼んで見べかと思う。

——旦那じゃ駄目だんべが御隠居なら……ひょっとすると脈があッかも知れぬ。

と、松三郎がそう言ったのは、忠吉の突きつけた真顔の勢いに押されたせいで、重次郎隠居なら脈があるかも知れぬという根拠は、実は彼には何もなかったのである。

重太郎旦那では駄目だという根拠はあった。それを忠吉は忘れた日とてないのである。忠吉と松三郎の家は、奥州街道を隔てて丁度向こう前であったが、三年ほど前、或る日この二人は連れだつて重太郎旦那の経営する肥料店へ豆粕を取りに行ったのであった。松三郎は十五枚すらすら受け取つて車に積んだが、五枚受け取りに行つた忠吉の方は、お前借用証書を持って来たかと旦那から問われた。彼はそれを持って行かなかつたのだ。

松三郎の方は証書一枚入れず十五枚すらすら持つて来られたのに、忠吉の方はたった五枚が渡して貰えなかつたのである。松三郎の方が例外なではなかつた。いっばしやっている農家なら肥料はすべて前借が普通で、それに証書を入れるなどという手續きはいらなかつた。例外なのは、家も屋敷もない、つまりそれらも賃借りをしている、ケツの下の地所も持たぬから、小作の忠吉の方であつた。

——そう思うならお前すくにも御隠居に頼んで見ろや、御隠居だつてお前の稼ぎ方は見られてから、ものになッかも知れぬな。

——見られてもな。この福原でそいつを見てね者は一人もあんめから……。

と、三次と芳太郎はその時一緒に草鞋を編みあげ、編み枠からはずし取った。

——それで、馬は心当たりがあんのか？ そいつがねえで頼みにゃ行けねど。

——ンだ。

——どこにある？

——ハツ山田のな、源太で売ってもええと言ってるだ。

——その馬見たのか？

——見て来た。

——ンならずぐ御隠居さ行って頼んで見ろや。脈はあるとおら見る。

と、松三郎は元氣をつけるつもりで言った。

——そうなツと、おら、二、三日前だったが、御隠居にいいこと言っといたぞや。

と、その時、新しく編み出しにかかりながら渡辺の芳太郎が三人を見渡して言った。

——何と？

——お前ら四人で毎晩糞仕事やってるそうだが随分達者になったべと言われるから、おら、毎晩集まってやるおかげで、四人ともいまじゃ人の倍もできるようになったと返辞しただ。ンならどれくれえできると訊かれツから、四人とも、簀二枚、草鞋二十足の腕前になりましたとおら返辞しただ。

——そうもできめが……。

と、橋本の三次が言うと、

——おら、できる。おら、いつか丁度それだけやったな。夜なべは別だ。

と、忠吉が答えた。

——そりゃうそだべ、何ぼ何でも倍もできるものかと御隠居が言われッから、御隠居さん、うそだと思いなさ  
ンならためしに忠吉さんを一日傭やとってやらせて御覧なせとおら言った。……御隠居だって忠ちゃんの稼かせぎはちゃ  
んと見てられッからな、こりゃものになッかも知れぬ。

芳太郎にもだんだんものになるように思われてくる。忠吉の稼かせぎ方には、その芳太郎でさえ内心舌を捲いて  
いるのであった。芳太郎や三次などの稼かせぎに舌を捲いているむらの人々は、忠吉に対してはそれを通り越してむ  
しろ呆れかえってさえたのだ。

昔から藁仕事と言えば草鞋なら十足が一人前の仕事とされていた。藁なら一枚、俵なら十枚である。それを忠  
吉ときたらこの頃では藁二枚をつくりあげて父親を魂消たまげさせ、草鞋二十足つくってすましかえっていた。

——それで、値の方は訊いたのか？

松三郎の表情がしだいに迫りついて来たのは、彼にもどうやらこのことの可能性が考え出されて来ていたから  
だ。

——四、五十円がどこだそうだ。

——米六俵だなや。

と、芳太郎が少しむずかしく眉を寄せた。

——ンだ、米六俵。

覚悟はしていると言ったふうに忠吉はうなずいた。

その頃米価は俵の八円、一駄十六円していたのである。

——そこで、おやじは馬買うの承知か？

——おやじが買うんじゃねえよ。おらが買うんだ。

それを知らなくはなかるうと言っているような眼のいろをちらりと見せて忠吉は松三郎に振り返りながら、

——おやじは馬なんかより家屋敷が先だと言うんだ。家も屋敷もねえ者が馬なんか買っても仕方なかんべと言  
つてなあ……。

——馬買って稼いでお前はその家屋敷買ってえと思ってるんじゃねえか……そうだべ？

と、芳太郎が加勢する口をきいた。

——んだ、稼がねばその家屋敷だつて買えねえものな。……何としてもお前馬買えや、二夫婦揃つて二  
町歩づくりじゃ少ねえものな。

——だが松さん、これで忠ちゃんが馬持ちになつと、ものすごく稼ぐべなあ。……思いやられんな……。

そう言った三次の肚は、そうなると新妻のフキヨさんもえらい目に遭うぞと言うつもりなのだ。

——人間これ以上稼いではならぬという掟はなかんべ。稼ぎ性というやつがおらたちの財産だもんな……。

彼等は、ひっきりなしに喋つても決して手を休めるといふことはなかった。口と手はべつべつのもものよ  
うにうごいている。そとは今宵も雪で、だいぶ吹雪いているようであった。五分芯のランプの焰が、風が唸  
ると、そのたびに身をすくめるように瞬いている。そのランプの石油も、もはや殆んどなくなったようである。

五分芯のランプの石油がなくなるまでこの薬仕事はつづけられるきまりであった。いつもこの四人で、場所は  
一晚交代でそれぞれの納屋をつかうというきめである。この夜なべで、一年中に使う簀や草鞋や草履、縄や俵を  
持ててしまうのだ。

そこへ三次の妻女がお茶を淹<sup>い</sup>れて運んで来た。母屋から来るうちに白髪になったように雪をかぶっていた。四人が起ちあがって藁屑をはたき、できた草鞋を数えたが、今宵も例のように忠吉だけが他の者より二足もよけいに持っていた。

——郡山の倉庫の政さんがまた来てるんだよ。

と、三次の妻女は言った。

——蔵<sup>くら</sup>入れする気だべかな、おやじさんは？

と、松三郎が眉をちりツと寄せた。

——入れるらしいよ。……何しろ今年や間違いなしだと政さんはこの間からついて離れねえんだよ。

——やめればいいなあ。……百姓がそんな気になったら糞は糶めなくならあ。

——ンだ。

と、忠吉は小声で、しかし断定的な言い方をした。

しかし、当の三次はそれに就いてべつに何とも言わなかった。

蔵入れというのは、地主や余裕のある自作農家が、米価の値上がりを見越して米を買い集め、それを倉庫会社などの倉に積んでおくことをいうのである。倉庫会社ではその品物を抵当に金も貸すから、やろうと思えば誰でも蔵入れはできるのであった。大抵は出来秋の頃買って入れ、端境期になってから売るのであったが、よそ目には坐っていて大儲けができるいい商売のように見えるのである。

——やっぱり糞を糶んでとった銭でなければ身につかねえかな。

と、芳太郎も真顔で言い合わせたが、三次は黙っていた。

——政のような野郎がむらへ入り込んで来ンのはよくねえ。  
と、むずかしい顔になって松三郎は独り言を言った。

政とはその倉庫会社のまだ若い手代で相当の腕っこきであるという評判であった。

夜の目も寝ずにこうして夜なべをし終えたところへそんな蔵入れの話など聞かされて、彼等は面白くもないと言った顔つきになって三次のうちの納屋を出た。吹雪くなかに糞をすっぽりとかむって飛び出した。——大正七年一月の夜のことである。

## 二

多賀田忠吉はケツの下の土地もたぬ貧農の長男である。

父親の利平は多賀田一族の出で、分家して一戸を興したが、仕事も早く、人並み以上の才覚はもっていたのに、よくないあそびごとが好きで、残る錢もそのためなくしてしまうというたちであり、人一倍稼ぐことはせず、普通に稼いで普通に飯を食ってゆけばいいという風な男であった。

奥州街道に沿い、郡山の北二キロ、富久山村福原むらの真ん中辺に、屋敷とも家賃年額十二円というみすばらしい家に住んでい、せめて家屋敷だけは自分のものにしたいたいという気さえあるのだからかわからぬと言った暮らしをしていた。それに妻女ときたら、よくしたもので、三日働けば二日は寝ると言った、ひよわい体格の持ち主であったし、おまけに子供が多く、暮らしは随分とひどかった。

一町歩ばかりの田をつくっていたが、四十俵の収穫に小作米は二十四俵運び出してしまうので、飯米は二月一杯でなくなってしまうのであった。それから先は肥料屋や米穀商からの借り食いであったが、それも南京米ばかり

り食った。南京米は安く、地米じまい四斗に対し六斗もくるといふ値であつたから、地米もそれととりかえて食った。それも、例えば田植え頃南京米六斗借りると、秋には玄米八斗にして返さなければならぬといふ途方もない利息を負わされるのであつた。その南京米さえ、米一方の飯は五月から九月までで、十月から四月までは大根を刻んでカテに入れる大根飯を食うと言つた暮らしであつた。

長い農閑期を親たちはぶらぶらして暮らしてしまふのであつたが、高等小学を出て百姓になつた忠吉は、車力に出、土方に出、せめて飯米だけは現金で買わなければと思つた。そういう途方もない利息がつく借り食いで、秋にいくら穫つても追いつく筈がないと思ふからだ。

そんなだから肥料もろくに入れることができなかった。思うほど借りられなかつたからでもあつたが、また利平はそれを多く入れて多く穫ろうといふ考えもべつに起こさなかつた。反四俵もとればいいとしていた。飯米の現金買ひのために車力や土方に出た忠吉は、せめて肥料をもつと借りられるために、出来るならそれをいくらでも現金買ひするために、藁仕事をやろうと思ひたつた。

忠吉のその藁仕事は、十六歳の時からはじまつたのだ。雨が降つたり、一日、八日、十五日、二十四日の月四日の休み日には、一日中それをやり、夜なべは毎晩欠かしたことがなかつた。十七の頃すでに草鞋十足、蓑一枚といふ一人前の仕事以上をやつていた。草鞋は一人当たり一年に五十足つかうものとされていたから、両親のと三人分百五十足編んでしまえばあとは残らず売りに出した。

一人前の仕事以上をすれば、そのよけい分を彼は自分持ちにしてはねておいた。また、月四日の休み日の仕事も自分持ちにした。そのほか正月の休みや野あがりや祭りなどの日も彼は藁屑をかむつて暮らし、火の番に出る夜も番所へ藁と道具を持ってゆき、合間に草鞋をつくつた。

肥料が買いたい。何とかして肥料を入れたい。そう思わぬ時とてなかった。父親の肥料の入れ方では、腹がへっている時に粥一杯しかあてがわぬようなもので、それでは田だって力だけ働くことはできぬのだ。それを利平に言えは、おうよ、田どころか、こちとらからして腹一杯食ってるんじゃねえと、あたりまえのような顔をするのだ。忠吉はそうは思わない。こちとらは腹をすかしていても、こちとらが腹をすかしていればこそ、田には腹一杯やらねばならぬ。そうすることよりほかに、こちとらが腹一杯食える方法はないではないか？……。

彼は藁や草鞋を売った銭は自分持ちにしてせつせと貯金にし、利平には内証で肥料を買って田に入れるのであった。肥料を入れたい。彼は街道に落ちてゐる馬糞でも野間ノノに落ちてゐる切れ縄でも捨て草鞋でも、肥料になるものはがさず拾い、田へ持って行って入れた。

むらは奥州街道に沿うて櫛の歯のように藁屋を並べ、その街道の両側には下水溝が流れているのであったが、忠吉はその水を田に引く場合には、必ず溝を攪乱し、汁粉のようになるまでかまましてから入れるのであった。せめてその沈澱物を肥料にしたいと思うからであつたが、それが思ったより効き目があることを知つた。そうなるとその下水溝ばかりでなく、どこの用水堀から水を入れるにも、彼は必ずどろどろに攪乱してから入れることにしたが、この経験は彼にとって新しい発見として心に刻み込まれた。

十九になつた、大正四年頃、忠吉はすでにその百姓熱心をもつてむらの人々の注視をあつめていたが、その年、埼玉県の篤農家権田愛之助が郡山に來、郡農会の主催で農會關係の人々を集めて麦作改良の講習會をひらいた時、彼はそのなかにまぎれ込んでその講習を受けた。ここのむらで麦の土入れというのを最初にやり出したのも彼であつた。

ここは田場所で、麦作は少なく、飯に麦さえ入れることができず大根のカテを入れていたのである。普通反当